複合動詞「～トオス」の史的変遷
―文法化に着目して―

池　田　來　未*

1．本稿の目的

「トオス」を後項にとる複合動詞（以下、「～トオス[1]」）には、現代語では「刺し通す」のような〈貫通〉の用法や「読み通す」のような〈一貫継続〉の用法がみられる。本稿では上代から近代の「～トオス」の用例をもとに,「刺し通す」など「通す」の語彙的意味を多く残した用法から「読み通す」などのアスペクト的意味を持つ用法に変化して文法化する過程を、「～トオス」の前項動詞と用法との関係に着目しつつ明らかにする。

2．先行研究

「～トオス」に関する先行研究には城田編(1998)、杉村（2012)、栗田（2018)、姫野（2018）などがあり、複合動詞の歴史的変化に関するものには百留（2002)、青木（2010）などが存在する。

先行研究では統語的な「～トオス」の前項にきやすい動詞に関する指摘がある。ただ語彙的な「～トオス」と統語的な「～トオス」とのつながりについて、前項動詞に着目した説明は不十分である。本稿では青木（2010）を参考に前項動詞に着目し、「～トオス」の用法変化の過程を明らかにする。

先行研究では「～トオス」の「貫通」が時間に拡張されたという指摘がある（許2016)。許の主張には概ね賛成するが、貫通する主体や経路が何であるのかに着目して、物体を貫通する〈貫通〉、空間を貫通する〈通過〉、時間を貫通する〈一貫継続〉との連続性を説明する必要がある。

3．調査資料・調査方法

3．1　調査資料

「日本語歴史コーパス[2]」、岩波書店の「日本古典文学大系」シリーズ（一部調査対象から除いたものがある)、中央公論社の『洒落本大成』の巻1-16、「明治の文豪」シリーズ、表現社の『大蔵虎明本狂言集の研究　本文篇』(上中下）を対象に、上代から近代までの文学作品や台本から「～トオス」の用例を採集した。また、「日本語歴史コーパス」と「日本古典文学大系」シリーズに同じ作品が存在する場合は前者のものを用いる。

「日本語歴史コーパス」は語彙素を「通す」とし、前方共起条件に「品詞－大分類－動詞」を加えてヒットしたものを調査対象とする。ただし、漢字熟語の可能性がある例（「徹透したり」など)、「振り仮名」が濁音である例（「苦しみ通し」:「振り仮名」は「どほ」など）や名詞として用いられていると判断した例（「引通し」など）などは除外した。また、「日本語歴史コーパス」のうち「太陽」「虎明本狂言集」は調査対象に含めない。

「日本語歴史コーパス」で検索した用例のうち、原本が小学館の「新編日本古典文学全集」シリーズであるものは、原本を参照して、一部、筆者が必要だと判断した情報（「萬葉集」における、対応する万葉仮名など）を付したものがある。また、

＊お茶の水女子大学大学院生

「新編日本古典文学全集」シリーズの作品名などは原本に従う。

それ以外の資料については平仮名及び片仮名の「とう（おふほを）す」、漢字の「通す」「徹す」「透す」を調査し、「トオス」の前にくる語（1語以上）が動詞の連用形であると判断したものを「～トオス」とした。「～トオス」の連用形で名詞として用いられているもの、漢字熟語の可能性があるものは除外した。また、かな表記や振り仮名から濁音化していると判断できる例は調査対象に含めない。ただ、漢字表記の例や濁音で示されていない平仮名・片仮名の例の中に「～どおす」のように濁音化した例が含まれている可能性がある。また、引用の際には一部表記を改めた箇所がある[3]。

3．2　調査方法

姫野（2018）の用法の分類を一部修正・追加して用いる。姫野（2018）は、「～トオス」を「突きとおす」のような「貫通」と、「歩きとおす」のような「一貫継続」の2つに分ける[4]。ただ、「～トオス」の用法変化を歴史的に明らかにするにあたり貫通する主体や経路を詳細に分ける必要があると考え、本稿では姫野（2018）の「貫通」を〈貫通〉〈通過（視線）〉〈通過（行程）〉に分けた。

【本稿の分類】

用法	貫通	通過（視線）	通過（行程）	一貫継続
例	刺し通す	見通す	引き通す	読み通す

〈貫通〉：物体が物体を貫通する

〈通過（視線）〉：視線が空間（抽象的な場合含む）を通過

〈通過（行程）〉：物体や風が空間を通過

〈一貫継続〉：前項に示された事柄が継続して行われる

上記の分類を用いて、「～トオス」の用法の歴史的変化を調査したうえで、これらの用法と前項動詞との関わり、用法の変化の要因を明らかにする。

4．　調査結果

4．1　上代

上代の「～トオス」の前項動詞[5]・用法ごとの用例数は以下の通りである。

前項動詞：射る⑵/刺す⑵/飼ふ⑴（※（　）内は各前項動詞の延べ語数（以下同様）。）

【表1】　上代　用法ごと

用法	貫通	通過（視線）	通過（行程）	一貫継続	計
用例数	4	－	－	1	5

【表1】から分かるように、上代の「～トオス」は〈貫通〉に分類される例が多い。

⑴　其の背皮を取りて、劔を尻より刺し通したまひき。（古事記　中巻　p.209）**〈貫通〉**

⑵　諸の人、的を射通すこと得ず。（日本書紀　巻第十一『日本書紀　上』p.394）**〈貫通〉**

〈一貫継続〉も存在するが1例のみである。

⑶　4183　ほととぎす　飼ひ通せらば〔飼通良婆〕　今年経て　来向かふ夏は　まづ鳴きなむを（萬葉集　巻第十九　『萬葉集④』p.313）**〈一貫継続〉**

4．2　中古

前項動詞：見る⑾/吹く⑺/謠ふ⑵/思ふ/兼ねる/切る/過ぐす/綜べる/踰む（以上1）

【表2】　中古　用法ごと

用法	貫通	通過（視線）	通過（行程）	一貫継続	計
用例数	2	11	4	9	26

中古では前項動詞のバリエーションが増え、〈通過〉が出現する。また、中古では「見る」が前項の〈通過（視線）〉の例が多い。

⑷　やをら見通したまへば、ただ同じほどなる

若き人ども、二十人ばかり、さうぞきて、格子あげそそくめり。(堤中納言物語　貝合　p.453)**〈通過（視線)〉**

⑷は少将の視線が部屋を通過することを表しており、〈通過（視線)〉であると解釈できる。また、中古になると〈通過（行程)〉もみられる。

⑸「この障子口にまろは寝たらむ。風吹き通せ」とて、畳ひろげて臥す。(源氏物語　空蝉『源氏物語①』p.123)**〈通過（行程)〉**

中古には〈一貫継続〉の例も９例存在する。

⑹　或いは七、八、五十日もしは百日の歌など始めて後、千日の歌も謠ひ通してき。(梁塵秘抄　梁塵秘抄口傳集巻第十　p.443)**〈一貫継続〉**

また中古にも依然として〈貫通〉の例は存在する。

４．３　中世

前項動詞：射る⑳/刺す⑼/見る⑷/突く⑶/切る/知る/吹く/申す/やる(以上２)/打つ/舁く/駆ける/聞く/捿る/誦す/堀る/ゑる(以上１)

【表３】　中世　用法ごと

用法	貫通	通過（視線）	通過（行程）	一貫継続	計
用例数	39	4	3	8	54

中世には〈貫通〉の例が多いが、これは軍記という資料の性質上生じたとも考えられる。

⑺　鎧の二三兩をもかさねて、たやすうゑとをし候也。(平家物語　巻第五　富士川『平家物語　上』p.372)**〈貫通〉**

中世には〈通過（行程)〉や〈通過（視線)〉も存在する。⑻は空間を通過させることを表す。

⑻　紀信といふ兵を高祖の車にのせて、項羽のぢんのまへをやりとをす時に、高祖はひそかにのがれさりぬ。(保元物語　上　左大臣殿上洛の事　pp.78-79)〈通過（行程)〉

⑼　よきに御祈誓ましまさば、姫君左右なく都に歸らせ給はん」と、見通すやうに占ひて博士はわが屋に歸りける。(酒呑童子　『御伽草子』p.363)**〈通過（視線)〉**

また⑼は占いで将来という時間に目を向けている例である。中古の「見通す」は隙間などの空間に視線を通過させるものであったが、中世では未来・将来などの時空間を見ることを表していると思われる。

４．４　近世

近世の「～トオス」の前項動詞・用法ごとの用例数は以下の通りである。

前項動詞：立てる⑽/刺す⑼/射る⑺/逢う(ふ)⑹/見る⑹/突く⑷/買う(ふ)/刳る(以上２)/遊ふ/居る/討つ/売る/書く/(口を)きく/気張る/来る/差す/指す/辛抱す/すく/競り合う/添ふ/達る/願ふ/張る/引く(以上１)/不明⑶

【表４】　近世　用法ごと

用法	貫通	通過（視線）	通過（行程）	一貫継続	不明	計
用例数	26	5	1	32	3	67

〈通過（視線)〉は中世同様、⑽のように未来など抽象的な対象に目を向ける例が目立つ。

⑽　手管の五手も十手も先を見通シおれに惚たと見せる（白増譜言経　(洒落本1) p.182)**〈通過（視線)〉**

また、近世には（義理などを)「立て通す」など、〈一貫継続〉の例が増加する。

⑾　手めへの勝手になる義理はたてとほしても、我儘に己への義理は何処でする。(春色梅兒譽美　後編　巻之四　第八齣　p.107)**〈一貫継続〉**

４．５　近代

前項動詞：押す⒀/張る⑼/突く⑺/読む⑺/立てる⑸/刺す⑷/泣く⑷/言う/射る/働く/吹く/遣る(やる)(以上２)/欺むく/苛める/祈る/居る/推す/思う/隠す/馳ける/勝つ/着る/苦しむ/籠る/射す/焦れる/辛抱する/透く/棄てる/仕る(する)

/為る(する)/説明する/(意志を)つく/啼く/悩む/寝る/引く/振る/藻掻く/行る(やる)(以上１)

【表５】　近代　用法ごと

用法	貫通	通過(視線)	通過(行程)	一貫継続	計
用例数	14	－	4	69	87

【表５】から分かるように、近代になると〈一貫継続〉の例が全体の約８割を占める。

⑿　この時ばかりは真面目になって、始から終まで読み通した。(坊っちゃん)**〈一貫継続〉**

５．用法の変遷

上でみてきた、上代から近代の用法の変化をまとめると次の【表６】のようになる。

【表６】　上代～近代用法ごと

用法	貫通	通過(視線)	通過(行程)	一貫継続	不明	計
上代	4	－	－	1	－	5
中古	2	11	4	9	－	26
中世	39	4	3	8	－	54
近世	26	5	1	32	3	67
近代	14	－	4	69	－	87

上代から近代まで、物体を物理的に貫く〈貫通〉は一貫してみられる。一方､「見通す」「吹き通す」などの、視線や物体、風が空間を通過する〈通過〉は中古に比較的多くみられるものの、しだいにその割合が減少していく。また、動作を継続する〈一貫継続〉はしだいに増加する。

許（2016）には、「(前略）起点から終点までの経路そのものに注目する『～通す』の『貫通』の意味特徴が時間にも拡張し、(中略)『～通す』の完了の意味に繋がる。」(p.136）とある。しかしここまで確認したように、「～トオス」には「見通す」「吹き通す」のように物体や時間だけでなく、空間を経路とする〈通過〉の例も中古に多くみられた。

結論から述べると、筆者は、この〈通過（視線)〉や〈通過（行程)〉の経路が起点や終点を必ずしも持たなかったことが、時間的な継続を表す〈一貫継続〉を派生させる契機になったものと推測する。〈貫通〉の「射通す」「刺し通す」などは物体が物体を貫くため、物を通す経路には明確な起点・終点がある。しかし、空間を経路とする「見通す」や「吹き通す」などは、視線や風の通過する起点や終点が視覚でとらえがたく、客観的には定めにくい。このように経路の起点や終点を定めにくい〈通過〉での「～トオス」が、時間的な事柄に適用されることで、開始点と終了点のない〈一貫継続〉という用法を獲得していったのではないだろうか。以下では、この仮説を具体的に検討するために、「～トオス」の前項動詞に着目した分析を行う。

６．前項動詞の種類と用法との関わり

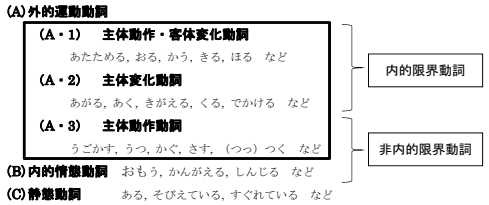
「～トオス」は、元々の語彙的意味であった〈貫通〉の意味が希薄化[6]（文法化）することで〈一貫継続〉の用法を表すようになったと推測される。この〈一貫継続〉は、通る経路に起点や終点を定めがたい〈通過（視線)〉や〈通過（行程)〉から派生したと考えられ、明確にはとらえがたい空間の起点や終点を、時間的な事柄に置き換えることで、始点（＝開始点）と終点（＝終了点）を持たない〈一貫継続〉の用法を生み出したと考えられる。

時間的な事柄に開始点と終了点を持たないということは、それは、動詞があらわす動作の達成される時点（＝終了限界）が定まっていない、非限界動詞であるということになる。

動詞のアスペクトを分析した工藤（1995）によると、動詞の終了限界の有無は以下のように分類されている。

工藤によると、現代日本語では、大部分の動詞が、ものの動態的な運動をとらえる（A）「外的運動動詞」に属するという。このＡを工藤はさら

【図１】



（工藤（1995）をもとに作成）

に３グループに分類する[7]（※【図１】参照。また、本稿では工藤の「(Ａ・１)」などの（　）を省略して「Ａ・１」のように示すことがある)。

工藤は、Ａ・１は「きる」「ほる」のように主体が対象（客体）に変化を及ぼす「主体動作・客体変化動詞」であり、Ａ・２は「きがえる」「でかける」のように主体の変化を前面化した「主体変化動詞」であるとする。そしてＡ・３は、工藤によると「うつ」「さす」「(つっ）つく」のように運動の変化には無関心で、動作の側面のみをとらえている「主体動作動詞」であるという。

このうち注目されるのは、Ａ・１、Ａ・２が、動作や変化の終了達成点をもつ「内的限界動詞」であるのに対し、Ａ・３がそれらを持たない「非内的限界動詞」であるとされている点である。

今回調査した「～トオス」の前項動詞は[8]、〈貫通〉では非内的限界動詞のＡ・３になるものが全体の９割以上を占めた。また〈通過（視線)〉〈通過（行程)〉でも前項はＡ・３がほとんどであった。〈一貫継続〉ではＡ・３が前項に来るものが多いものの、Ａ・１ Ａ・２やＢ、Ｃが現れる例も見られる。【表７】は、用法ごとの前項動詞を上記【図１】の分類に従って示したものである（用例数の下に示したのは前項動詞の例)[9]。

【表７】

動詞分類 ＼ 用法	内的限界動詞		非内的限界動詞		－
	Ａ・１ 主体動作・客体変化動詞	Ａ・２ 主体変化動詞	Ａ・３ 主体動作動詞	Ｂ 内的情態動詞	Ｃ 静態動詞
貫通	5 切る/堀る	－	80 射る/刺す	－	－
通過(視線)	－	－	20 見る	－	－
通過(行程)	－	－	10 吹く/射る	－	－
一貫継続	3 売る/買う	3 勝つ/着る	83 申す/読む	7 思ふ/願ふ	2 居る

物体が物体をつらぬく〈貫通〉では、「切る」「堀る」のように対象（客体）に変化を及ぼすＡ・１の動詞が前項に来やすいように思われる。しかし【表７】の通り、それらは〈貫通〉の１割にも満たず、残りはすべて「射る」「刺す」など、主体の動作のみをとらえるＡ・３の動詞であった。

⒀　諸の人、的を射通すこと得ず。（日本書紀巻第十一　『日本書紀　上』p.394）（前掲⑵の再掲）**〈貫通〉【射る＝Ａ・３】**

⒁　捨たる鑓を取手も見せず本藏が。馬手の肋弓手へ通れと突通す。（仮名手本忠臣蔵　第九『浄瑠璃集　上』p.360）**〈貫通〉【突く＝Ａ・３】**

〈通過（視線)〉や〈通過（行程)〉にあたる例も、前項は「見る」「吹く」など、対象（客体）に変化を及ぼさないＡ・３の動詞がほとんどである。

⒂　やをら見たまへば、（中略）几帳どもの立てちがへたるあはひより見通されて、あらはなり。（源氏物語　蜻蛉　『源氏物語⑥』p.248）**〈通過（視線)〉【見る＝Ａ・３】**

すなわち、〈貫通〉も、〈通過（視線)〉〈通過（行程)〉も、対象（客体）に変化を生じさせず、主体の動作のみに着目したＡ・３「主体動作動詞」が前項に来やすいことが窺える。

工藤（1995）によると、このＡ・３の「主体動作動詞」は、非内的限界動詞であることが説明されている。前述の通り、非内的限界動詞とは、「切る」に見られるような動作や変化の終了達成点を持っておらず、動きのどの時点を観察しても動作が成立している動詞を指す（例：「叩く」「歩く」)（工藤 1995：57-58)。

これらの非内的限界動詞が、〈貫通〉から〈一貫継続〉まで一貫して「～トオス」の前項に来ているということは、「～トオス」の表す前項の動作が、いずれも終了達成点を持っておらず、時間的に遮られることなく継続することを意味する。

⑯　木枯のたへがたきまで吹きとほしたるに、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を（源氏物語　宿木　『源氏物語⑤』p.462）**〈通過（行程）〉【吹く＝Ａ・３】**

⒄　其ノ墓所ニ、毎夜ニ法花経ヲ誦スル音有リ。「必ズ一部ヲ誦シ通ス」ト。（今昔物語集　巻第十三　第三十　『今昔物語集①』p.359）**〈一貫継続〉【誦す＝Ａ・３】**

⒃の「吹きとほす」は、吹くという物理的な空間における〈通過〉が、終了達成点なく継続していることを表しており、⒄の「誦シ通ス」も、誦すという表現活動がいずれかの時点で完了することなく継続していることを表している。

このような、「～トオス」の前項における非内的限界動詞の特性が、空間から時間へと拡大することで、用法が〈通過〉から〈一貫継続〉へと拡張していったものと考えられる。また、〈一貫継続〉は、時代が下ると同じく非内的限界動詞であるＢ「内的情態動詞」の前項動詞も増えるようになる。

以上のように、前項動詞が非内的限界動詞であることにより、「～トオス」の前に来る動作に終了点がなく、一貫して行われることとなり、それが空間的なものから時間的なものを表すことへと拡張されることによって、〈通過〉から〈一貫継続〉の用法へと発展していったものと推定される。

７．まとめ

本稿では上代から近代の用例をもとに「～トオス」の用法の歴史的変化を調査した。調査の結果、「～トオス」は大きく〈貫通〉→〈通過〉→〈一貫継続〉の順に用法を展開させていくことが分かった。またどの用法においても、前項の動詞には動作の側面のみをとらえる動詞（工藤のＡ・３「主体動作動詞」）が来やすく、これはどの時点においても動作が成立しうる「非内的限界動詞」であった。この非内的限界動詞が、文法化して空間から時間に適応されることによって、「～トオス」は、動作の継続（〈一貫継続〉）というアスペクト的意味を表すようになったと考えられる。

注

1　先行研究について言及する際に、トオスを前項にとる複合動詞について本稿とは違う形で示されていた場合でも、本稿では便宜上それらを「～トオス」で示す場合がある。

2　国立国語研究所（2018）『日本語歴史コーパス』https://chunagon.ninjal.ac.jp/（2018年８月27日確認）

3　また、「和泉式部集」と「新古今和歌集」に同じ歌と考えられるものが存在するなど、重複する可能性のある例がいくつか存在したが、どちらかを除外することはしなかった。

4　これらの例は姫野（2018: 189）の表より。

5　前項動詞が漢字で示されていない場合、筆者がどの漢字にあたるか判断して漢字で示したものがある。また、片仮名表記を平仮名にした部分がある。（以下同様）

6　ホッパー＆トラウゴット（2003）（Hopper & Traugott 1993の邦訳）には「後の段階になって文法化が進み，形式が慣習化すると，意味の喪失や『意味の希薄化（bleaching）』が起る。」（p.85）という指摘がある。

7　工藤（1995）は（Ａ・１）、（Ａ・２）、（Ａ・３）をそれぞれさらに詳細に分け、またＢ「内的情態動詞」やＣ「静態動詞」もさらに細かく分類しているが、ここでは詳しく触れない。

8　用法の分類で「不明」とした例は調査対象に含めない。また、前項が「やる」「する」「（義理などを）立てる（達る）」は、前項動詞分類を不明としたため、【表７】に含めない。

9　杉村（2012）には「射通す」が「貫通」だけでなく「一貫継続」にも用いられることが指摘されている（杉村2012: 53）が、発表者による調査では、調査対象とした「射通す」は〈貫通〉あるいは〈通過（行程）〉であった。

〈参考文献〉

青木博史（2010）「第２章『～キル』の展開」青木博史『語形成から見た日本語文法史』（ひつじ研究叢書〈言語編〉第90巻）ひつじ書房、pp.147-165（初出：青木博史（2004）「複合動詞『～キル』の展開」『国語国文』第73巻第９号（841号）中央図書出版社、pp.35-49）

許臨揚（2016）「中国語との対照の観点から見た日本語の複合動詞の意味特徴－完了を表す類義語『～切る』『～抜く』『～通す』を例にして－」『日中言語対照研究論集』第18号、日中対照言語学会、pp.124-142

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』（日本語研究叢書【第２期第７巻】）ひつじ書房

栗田奈美（2018）『視覚スキーマを用いた意味拡張動機づけの分析――完遂を表す複合動詞『～きる』『～ぬく』『～とおす』の場合』春風社

城田俊編（1998）『日本語形態論』（日本語研究叢書【第２期第８巻】）ひつじ書房

杉村泰（2012）「コーパスを利用した複合動詞『V1-通す』の意味分析」『言語文化論集』第34巻第１号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、pp.47-59

百留康晴（2002）「複合動詞後項『―出す』における意味の歴史的変遷」『文化』第66巻第１・２号、東北大学文学会、pp.17-33

姫野昌子（2018）『新版　複合動詞の構造と意味用法』研究社（初出：姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』（ひつじ研究叢書（言語編）【第16巻】）ひつじ書房）

Hopper, Paul J. & Traugott, Elizabeth Closs (1993). *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press（P.J.ホッパー&E.C.トラウゴット著・日野資成訳（2003）『文法化』九州大学出版会）